

脳死と人の死

医学部外科学第二講座

渡辺浩志

我思う、故に、我あり

脳死になれば、他の臓器の機能もいずれはすべて停止してしまうことは、先に述べた。しかし、脳死が（外国で）人の死として認められたもう一つの大きな理由は、このデカルトの言葉にある。人の本質は、脳の働きによる精神活動にあるということが、常識となっ

ているからである。したがって、図1のセリフの前半は、たぶん可能性があるが、後半の部分はおそらく起こらないと思われる。もしあり得るとしても、「脳移植を受ける」ではなく、「身体を提供する」という表現にされるべきであろう。脳死を人の死とする、というのは、人を精神と身体の関係として合理的に扱おう、というデカルトの合理主義の原点に沿った判断だと思ふ。

万人にとっては死は避けられないものである

死を客観的に判定する立場から考えを述べてきたが、一方、個人として自分の死を考えるのはずっと難しいことに気がつく。死を経験したことのある人は普通はいないであろう。そして私を含めて大半の人は、死は何かしら恐いもの、忌むべきものとして、真面目に考えるのを避ける傾向にあるようだ。

人は、真実よりも自分の信じたいことを信じ、現実を合理的に考えるというよりも自分

の考えに従って現実を合理化して考えたがるものである。死が避けることのできないものとして迫ってきた場合、その合理化の能力、悪くいえばごまかしの能力は、大きな試練を受ける。

死を身近なものとして意識しているような人々、例えば宗教関係者の中にも、時には取り乱してしまう人もいるが、逆に落ち着いた深い思索のうちに人生の終末期を迎えられ、驚くほどの優れた仕事を最後まで成し遂げられる人もいる。

脳死は、十分な知識と能力のある専門医によって、きちんと手順を踏んで判定された場

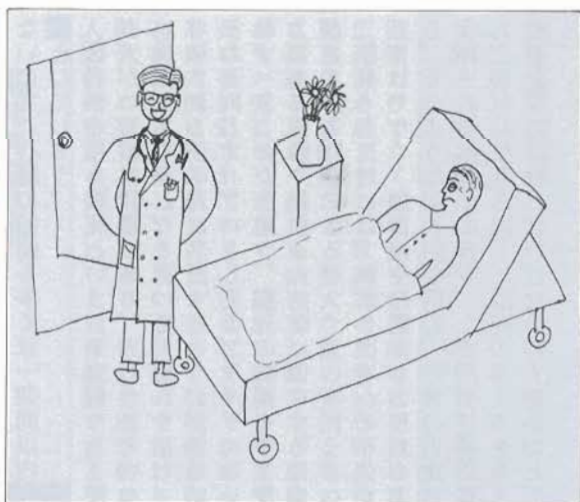


図1…21年後の大病院で—20年前に移植した肝臓はうまく働いています。今度は脳の機能が落ちていたので、脳を移植してもっと長生きしましょう。」

合、現在のところ最も信頼性の高い、客観的、合理的な人の死の認知だと思ふ。一方で、人にはそれぞれの生き方、死に方がある。脳死問題を含めて、時折は、人生の中で自分の死にどのようにつき合っていくのか、どのような形で迎えるのかなどの覚悟も必要であろうし、それがまた自分の生を充実させることになると考える。